

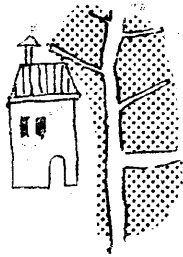
わけではない。何事も研究はつらい？

自然の岩を利用したトンネルを通りぬけながら、静内のウグイス谷観光ホテルへと向かう。が、予定時刻の16時30分を過ぎても、旅館の影も形も見えてこない。左手に広がる大平洋に沈みゆく夕日に歓声を上げている間はまだ良かったが、貧困さをむき出しにした漁村がただ夕刻の光の中に過ぎてゆくばかりで、だんだんと不安になつてくる。

その待ち焦れた宿に着くこと、18時30分。皆、空腹の為、目をまわし足をガクガクいわせながら、さつそく大広間へ。しかし、又、待てど暮らせど食事が出て来ない。気の早い人が台所へのぞきに行くと、何んと御飯を漉している最中であつた。カツクン!! 入浴後部屋に帰ると、おにぎりが来ていた。小さな旅館で人手不足の様であつたが、家庭的なところが嬉しかった。

朝食では、旅に出て初めての梅干し。夜はおにぎり……何んだかチヨツピリ家が恋しくなつた。

静内 → 登別



9班 短食 2 の 3

(河原崎, 寒川, 吉川, 高坂)
近藤, 斉藤, 笹原, 瀬野)

7月24日(第10日目)

9時に出発して、やつとこさで、北海道と言えばアイヌ部落と口に出るほど有名な、我々待望の白老のアイヌ部落へ到着した。小さな部落で家々もみすぼらしく観光用の店がほとんどである。広場の隅の方に、熊まつりにいけにえとしてささげられたという熊の頭の骨などが、木の檜にささかれて、たてかけてあり無気味であつた。次に老人、婦人四人のアイヌ人の踊りを見た。手を打ちながら声をかけ合い、一定の円をまわるだけであつたが、何やら、真に迫るものを感じた。しかし、これらの踊りも、只、観光客のためにのみ見せるもので、もちろん現在、実際に行われているものではあるまい。この婦人達は、どういう気持で、我々にこの踊りを見せているのだろうか、とフト思つたりした。次にアイヌ人の小屋に入つて、尊長、官本トモムラの話聞く。あごひげの白く長い老人であつたが、なかなかシヤンとしていて健康そうであつた。その中には、昔のアイヌ人の使用した用具

等たくさんあり、説明によるアイヌ人の生活様式、小屋の建て方等、興味をもつて聞いた。その老人の説明の仕方といい、皆を笑わせる方法といい、観光客に対する話し方は、なかなか堂に入ったもので楽しかったが、「観光バスが多く来て金を置いて行ってくれることを祈る。」なんて、冗談であろうけど、言われた時には悲しく思ったりした。現在、アイヌ人の数は非常に少なくなっていると聞く。それ故に、人種の違うという事を一般の人々に公開して生活する。それも一つの商売であるかもしれないけど、もつと地味に、アイヌの生活を残しておいてほしいと思つた。それは、私達の為ではなく、彼らの為に。だが世の人々は、珍らしく数少ないものに興味を示すし（私達もそうであるからこそ、ここへ来たのだが）それを、あてにして商売するのも世の常である。しかし、アイヌの場合、観光化されることによつて、その純粋性というものが失なわれてしまうのではないか、と思う。かと言つて、アイヌの人々の、いわゆる純粋と言われる生活は、実際には不便であるし、又、世間の差別ということもあるので、私達と同じ生活に移つてしまつて、なお且つ純粋なものを残すという事は、むずかしいであろう。只、観光用としての部落が出来、アイヌの生活様式を見せる、ということになつてしまう。こうなるのは必然的であるかもしれないけど、種族が亡びてしまうことに、又、あまりに観光的になりすぎているアイヌに、一種のわびしさを感じないではいられなかつた。

楽しい一時であつたが、この様な考えがチラチラと頭に浮かんで来て、少々沈んだ気持にもなつたが、登別へ向うバスの中の、歌を歌つたり、おしゃべりしながらの旅に、いつしか楽しさを追うだけの観光客となつて、今日の目的地、登別では、楽しい夜を過ごしたし、又、ぐつすりねむることも出来た。



登別 → 洞爺湖

10班 短食2の3,4
(谷口, 岡田, 中田, 出原)
(谷, 田北, 高木, 武田)

7月25日(第11日目)

この日は登別の日活ホテルを出発して昭和新山へと向かう。昭和新山とは個人の所有物